

理想の「白」求めて

第6部 陶磁器を世界へ〈4〉



中部財界ものがたり

一枚の皿が純白かどうかをめぐって、森村組（現森村商事）の首脳二人が大げんかを始めた。「純白だ」と言い張ったのは、新商品のデザイナーセットの開発に挑んでいた大倉孫兵衛。

「まだ純白ではない」と切り捨てたのは、義兄で創業者の森村市左衛門だった。

一九〇九（明治四十二年）、今の名古屋市西区則武新町に建てられた日本陶器（現ノリタケカンパニーリミテド）の工場。大倉が苦心して作り上げた皿は、土の特性からわずかに灰色がかっていた。

「これほど純白なのに。あなたは色眼鏡で見ている」。大倉の反論に、市左衛門が色をなす。「色眼鏡とはけしからん」。互いに譲らず、「もう頼まない」と市左衛門。大倉も「よろしい。頼まれません。私は

やめます」と言い放つ。

一時帰国していたニューヨークの森村ブラザーズ総

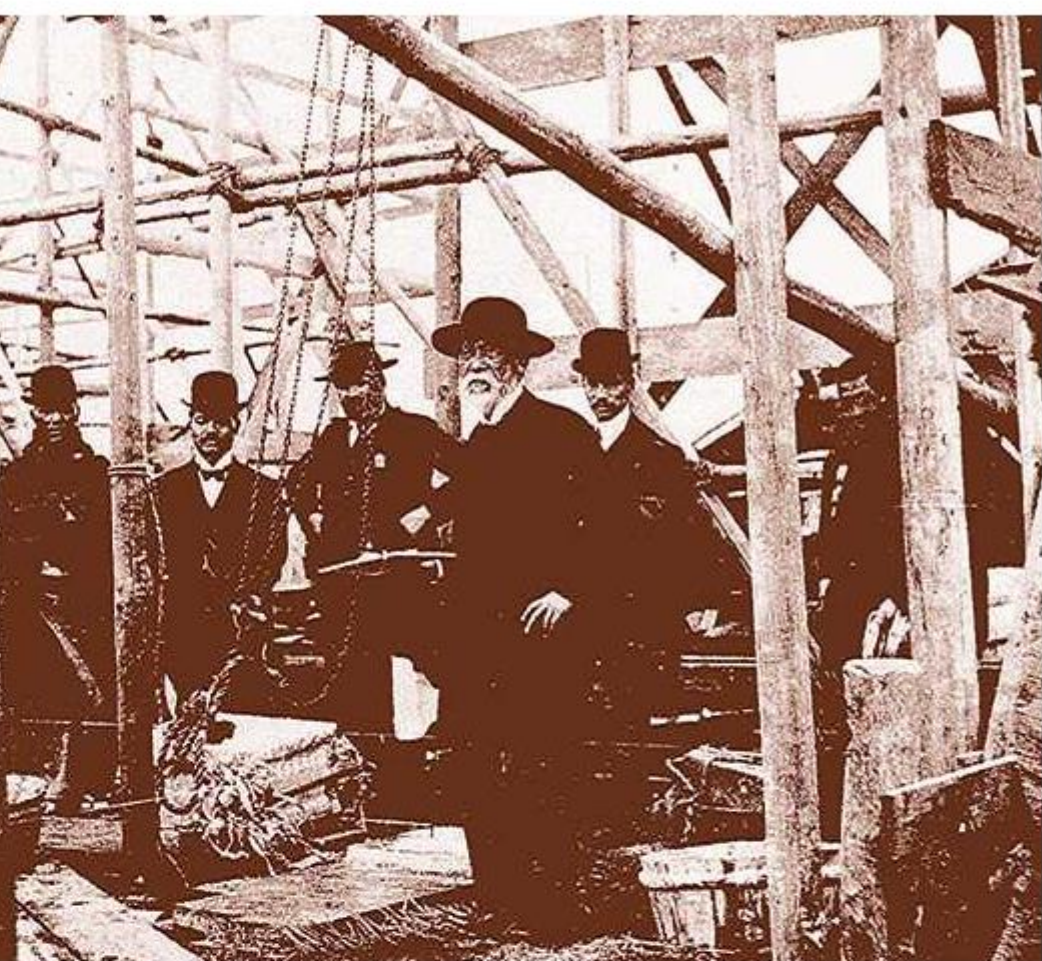
支配人の村井保固（故人）が仲裁に入り、その夜、名古屋の料亭「百春楼」で一席設けた。二人は互いに「言いすぎて失礼した」と仲直りする。村井の伝記は「白生地」に熱中した目には「純白と映るが、冷静に見れば不純白にもなる。事業本

位から出た一時の興奮にすぎない」と振り返る。

デザイナーセットの開発が始まったのは、二人がけんかする十五年前の一八九四年。きっかけは、森村ブラザーズを訪れた米国の百貨店「ヒギンズ&サイター」の主人から村井への忠告だった。「装飾品の商売では需要も限られる。日用品のデザイナーセットを作り、数で利益を上げた方がいい」。課題も付け加えた。

「今のような灰色の生地はだめ。欧米では食欲をかき立てる純白が好まれる」。村井から話を聞いた市左衛門と大倉は、すぐにデザイナーセットの開発にかかった。しかし、瀬戸や美濃の業者に頼んでも、望むような生地はできない。森村組は今の東京工業大出身で陶磁器研究の第一人者、飛鳥井孝太郎（故人）を招き、生地の独自開発に乗り出す。飛鳥井と大倉らは一九〇三年に陶磁器の先進国、英国を訪れ、陶磁器に耐水性を持たせる釉薬や窯を研究する。自信を深めた大倉は、市左衛門と陶磁器工場の建設を決めた。

翌〇四年一月、日本陶器が発足する。工場を則武に建てたのは、名古屋駅に近い割に土地が安く、土に混ぜる良質な水が出るからだ。後に地名から取ったノリタケを社名とし、今も同じ場所にノリタケの本社が立つ。工場の礎石には「わが国の貿易を隆盛ならしめんがため、日本陶器を設立する」と宣誓を焼き付



日本陶器創業の宣誓を焼き付けた陶板を持って、工場の建設に立ち会った森村市左衛門（右から2人目）ら。1904年、今の名古屋市西区で（ノリタケカンパニーリミテド提供）

日本陶器 1904（明治37）年に森村組幹部らによって設立された洋食器製造会社。81年に現在のノリタケカンパニーリミテドに社名変更した。14年に国産初のデザイナーセットを発売。35年に高級食器に使う透明性の高いボンチャイナの本格製造を始めた。39年から軍需産業に必要な工業用砥石（といし）の製造を開始。軍需最優先となった43年に食器生地の製造を中止、砥石生産に全面移行したが、戦後の45年に食器生産を再開した。現在は洋食器、工業用砥石に加え、電子部品や加熱装置など陶磁器の技術から派生した幅広い製品を製造している。

工場完成後 製品化に苦闘

けた陶板を埋め込む。貿易会社の森村組が、陶磁器の製造に本格進出した瞬間だった。

しかし、工場が完成しても開発は進まなかった。飛鳥井は白さと加工のしやすさを両立させようと、九百四十種類もの土の組み合わせを試したが、成果は出ない。石炭を使った最新式の窯も技術不足で大量の不良品を出し続ける。ついに市左衛門と大倉の大げんかにまで発展してしまう。

製品はできないのに煙を吐き続ける工場を見て、近くの住民たちは「日本陶器では石炭でなく、お札を燃やしている」と皮肉る。それでも市左衛門はあきらめない。市左衛門の弟豊の孫で東京に住む森村豊治（とよぢ）は「続けるべきか、かなり葛藤はあったと思う。それでも続けたのは市左衛門の不屈の精神だ」とたたえる。並外れた辛抱強さが、やがて実を結ぶこととなる。（文中敬称略）

「時流の先へ 中部財界ものがたり」の過去の記事は、中日プラス（chuplus.jp）で閲覧できます。